2. 水路と民家の距離感

今回調査した集落は基本的に水路が維持されており、民家は水路にごく近い位置にあった。しかしながら 、人に与える水路と民家の距離感は、集落によって少々異なっている。水路と民家の距離が最も近いと感じたのは、雨森と保延寺の 2 ヶ所である。他の集落との比較から、この感覚の差は以下の 3 つの要素に影響されているものと思われる。

(1)水面と地面の高低差

雨森を唐川と比較すると、両方とも民家は水路と隣接していて、水路の幅もほぼ同じだが、唐川の水路より雨森の方が水路と近しい印象を覚える。これは、雨森の地面と水路との高低差が唐川よりも小さいことによるものである。

図 5. 雨森（謝撮影）

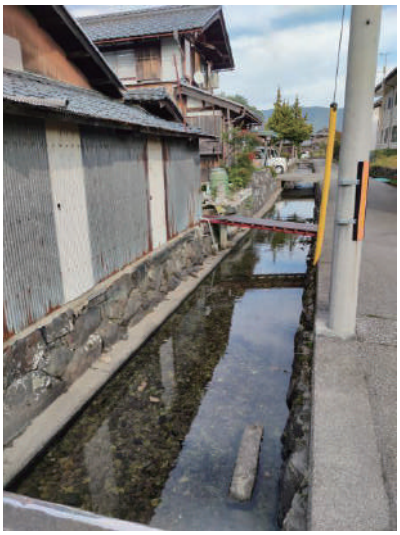


図 6. 唐川（謝撮影）

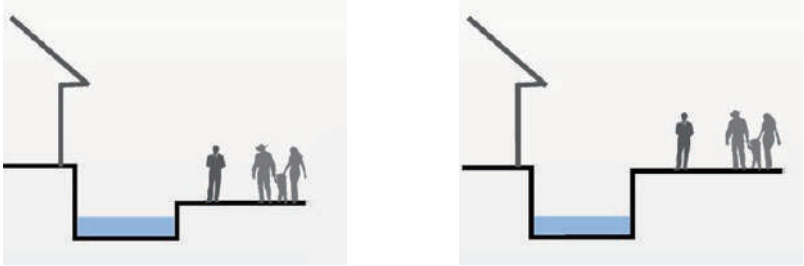


図 7. 断面ダイヤグラム（左：雨森、右：唐川、筆者作成）

(2)水路に降りる階段の有無

保延寺を柏原と比較すると、水路と道路面の高低差はあまりない。しかし、保延寺では水路に降りられる階段があり、地域の人々が日常的に水路を使っている印象を受け、水路と民家の距離感は近しい。逆に柏原の民家は水路に降りられる階段がなく、人々が水路の水をあまり使っていない印象を受けた。

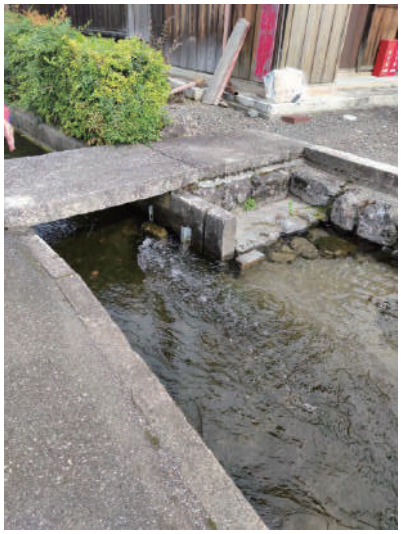
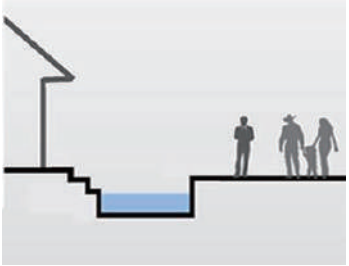


図 8. 保延寺（謝撮影）

図 9. 柏原（細井撮影）



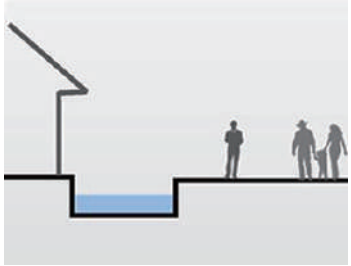


図 10. 断面ダイヤグラム（左：保延寺、右：柏原、筆者作成）

(3)水路の幅

保延寺や雨森と比べて、東物部と西物部の水路の幅はより狭く、生活の中で使われる寸法ではない。

図 11. 東物部外部の水路の幅（東野撮影）

図 12. 東物部内部の水路の幅（東野撮影）

3. 実見で得られた水路の使い方

（1）共通な水路の使い方

排水：最も普遍的に見られた水路の使い方は雨樋を通して雨水を水路に排出することである。

図 13. 集落内の水路による排水（荻野撮影）

図 14. 集落内の水路による排水（伊東撮影）

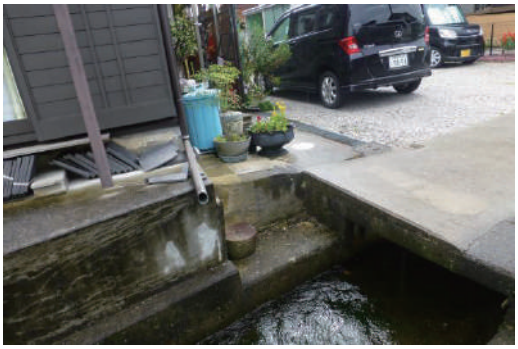


図 15. 集落内の水路による排水（荻野撮影）

図 16. 集落内の水路による排水（伊東撮影）

消防：各集落水路の付近には止水板やホース収納ケースが多数整備されている。

図 17. 集落内の消防用具の設置（細井撮影）

図 18. 集落内の消防用具の設置（東野撮影）

図 19. 集落内の消防用具の設置（斎藤撮影）　**図 20.集落内の消防用具の設置（謝撮影）**

（2）各集落ごとに固有な水路の使い方

洗い場：雨森や保延寺にある水路と近しい家屋には、水路の傍に洗い場を設置している。

図 21. 雨森にある洗い場（細井撮影）　**図 22. 保延寺にある洗い場（荻野撮影）**

生簀：雨森の一部の水路は生簀として用いられている。

図 23. 生簀としての水路の利用（謝撮影）

4. 考察

3 章では、水路と各集落の家屋との位置関係及び現在水路の使い方についてを述べた。消防と排水に用いられる水路の使い方は各集落で見られて、水路は現在でも一定の役割を果たしていることを考えられる。

今回の調査では、現在でも日常生活に水路を活用している集落は、水面と地面の高低差が少なく、水面に降りれる段差があり、幅の広い水路を持つ雨森と保延寺だけである。 一方、水面と地面の高低差が大きく、水面に降りれる段差がない水路を持つ唐川と、幅の狭い水路を持つ東物部では、日常生活に水路を利用している例が相対的に少ない。水路のかたちの差異は村人の利用意欲に影響を与えることが考えられる。

筆者の感覚では、今回調査した各集落の中で、最も保存状態の良い水路は雨森である。上記の日常生活で水路を積極的に利用する実用的な機能に加え、水車などの観賞物が設置されて、観賞用の機能も備えており、景観としても重要な役割を果たしている。保延寺の水路は雨森と類似なかたちを持っていて、村人の日常生活に積極的に用いされている。唐川、柏原と東物部では、調査で水路を日常生活に利用してる様子は見られなく、基本的な機能だけを維持されていることがわかった。

5. まとめ

今回調査した集落は基本的に水路が維持されており、民家は水路にごく近い位置にある。その中でも集落ごとに水路の印象は異なっており、（1）水面と地面の高低差（2）水路に降りる階段の有無（3）水路の幅の 3 つの要素は、各集落が人に与える水路と民家の距離感に関わっているといえる。また実見によって、現存している水路の使い方は消防や雨水の排水など日常生活に用いられる以外、集落の景観を構成する要素として活用されていることが確認できた。

伊香郡富永庄現在地にみる集落構造と土地条件の関係

早稲田大学中谷礼仁研究室
修士２年　荻野智樹

0. はじめに

0-1. 本稿の目的

本稿では、今回の調査対象地である伊香郡富永庄現在地において、各集落の構造を比較し、土地条件の違いが集落構造の形成にどのような影響を与えているかを検証する。

0-2. 手法

富永庄域のうち、保延寺・雨森・唐川・東物部の４集落に着目し、水路、街路、家屋配置の形態的特徴を分析し、集落構造の成立順序を考察する。さらに、それを土地条件と照らし合わせることで、土地条件が集落構造の形成に与える影響を考察する。

0-3. 既往研究

近江盆地は、山地・丘陵・段丘・沖積低地（扇状地・氾濫原・後背湿地・三角州）と土地条件のバラエティーに富み、かつ近世以前の水論に関する史料や条里遺構、灌漑慣行の記録が多く残っている。本調査の対象地である高時川流域に関しては、水利形態や水利集団に関する研究が複数行われており、歴史学の立場からは高島緑雄の研究[1]、地理学の立場からは野間晴雄の研究[2]が例として挙げられる。

これらの研究からは、

- 高時川流域では中世後期より同一用水で結ばれる郷村の連合が存在し、近世初頭には現在とほぼ同じ用水系統をもつ水利集団（井郷）が形成されていたこと。
- 高時川西岸は上水井組・大井組・下井組に編成され、大井組は上六村（井口・雨森・持寺・保延寺・柏原・渡岸寺）と下六村（東物部・西物部・横山・唐川・磯野・柳野中・高田）からなること。
- 扇状地ではとりわけ強大な水利集団が発達し、集団内でも歴史的背景・位置などから主導権をとる井元（井頭）がはっきりしていること。

などが分かる。

一方で、現在みられる集落の形態に土地条件がどのように作用しているか、という観点に基づいた研究は、管見の限りでは見られなかった。本研究では、現前する空間は先んじて存在している自然・都市・建築的スケールにおける形態要素から無意識のうちに影響をうけているとする中谷礼仁「先行形態論」[3]の視点を基に、富永庄現在地の集落の形態に見られる土地条件の影響を考えてみたい。

---

[1] 高島緑雄「近世的用水秩序の形成過程-近江伊香郡･浅井郡用水の研究-」『駿台史學』39（1976）pp.1-35

[2] 「近江盆地における伝統的農業水利体系と村落結合―『農業ノ水利及土地調査書』の分析（2）―」『歴史地理学紀要』 31（1989） pp.83-130

[3] 中谷礼仁「先行形態論」『セヴェラルネス+ 事物連鎖と都市・建築・人間』（鹿島出版会、2011）所収

1. 伊香郡富永庄の荘域

伊香郡富永庄は 13 世紀中ごろから 16 世紀後半まで存続したとされる山門領荘園である。荘域は長浜市高月町の東宇根・西宇根・東阿閉・高月・森本・落川・馬上・渡岸寺・柏原・雨森・保延寺・持寺・井口・尾山・洞戸・高野・東物部・西物部・横山・唐川・熊野・西野・松尾・片山、木之本町の石道・小山・田部といった地域に比定されており、大部分が高時川沿いの平野部に位置している。何時、どのように成立したかは明らかでないが、条里制遺構が見られ、早くから開発が行われたことが推測される[4]。航空写真と荘域を重ねたのが図 1 である。荘域の大部分が平野部に位置し、東西と北を山に囲まれていることが分かる。

図 1. 富永庄の比定領域（Google Earth より筆者作成）

[4] 網野善彦他『講座日本荘園史 6』（吉川弘文館、1993 年）p.269 参照。

2. 富永荘域の土地条件

富永荘の荘域の土地条件をまとめたのが図 2 である。荘域の大部分が平野であるが、実際には東側は扇状地、西側は氾濫平野・後背湿地・自然堤防と、土地条件が異なっていることが分かる。一般に扇状地の中央付近では水が伏流するため水利上不利である。また後背湿地や氾濫平野は水を得やすい平坦な土地であるため農地として使われることが多いが水害のリスクは高く、居住地は比較的高い土地である自然堤防に立地することが多い。

荘域の東半分では、一般に水利上不利な扇状地の中央部にも集落が分布していることが確認できる。一方西半分では氾濫平野・後背湿地に農地が広がり、自然堤防上に居住地が分布する典型的な集落立地をとっている。

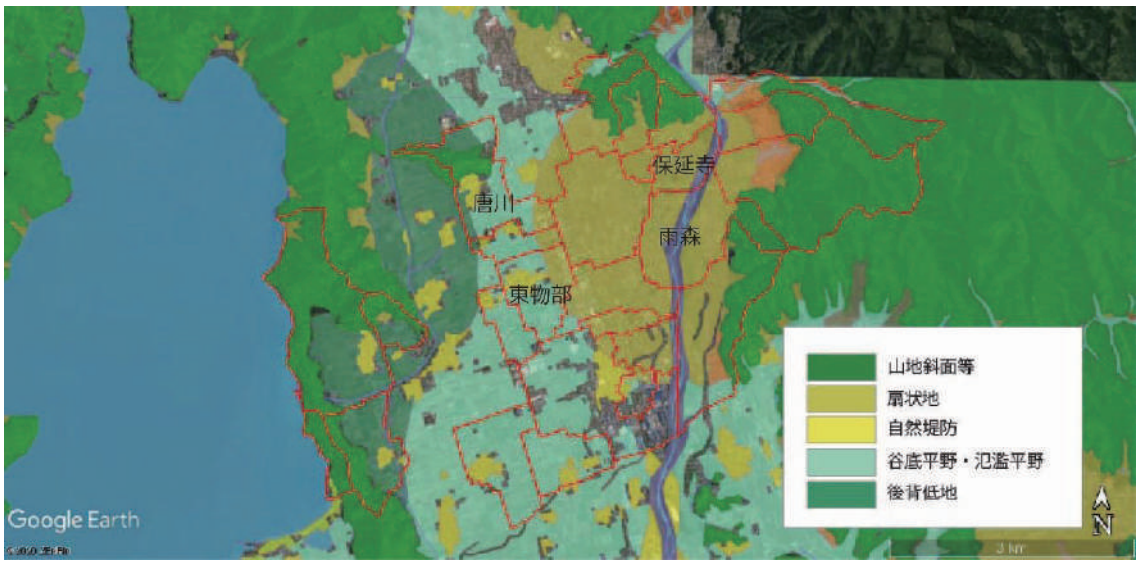


図 2. 富永荘域の土地条件（国土地理院地図「土地条件図」より筆者作成）

3. 各集落の様相

本章では、今回の調査にて実見した個々の集落の水路、街路、家屋の配置に着目し、集落のかたちがどのような順で形成されたかを推察した。

3-1. 保延寺

○立地

保延寺は荘域の東北部、高時川右岸の扇状地に位置する集落である。

○水路

水深の浅い水路が集落内のいたるところに巡らされている点が特徴的である。各住居には水路へとアクセスするための2段分ほどの階段が設けられていて、現在でも洗い場として使用されている様子が見られる（図3）。

○家屋配置

各家屋は玄関もしくは勝手口が水路と接するように配置されている(図4)。各家屋の敷地の間には石垣や生垣は設けられておらず、境界が曖昧である。

○街路

街路は家屋の間を縫うようにランダムに通されている。また、街路と各家屋との間にも石垣や生垣はなく、境界が曖昧である。(図5)。

○形態的特徴のまとめ

水路、街路、住居配置を整理したのが図6である。集落はおおむね方形をしており、その外周を街路と基幹となる水路が囲んでいる。区画の内部には、外周の水路から分岐して、集落内部を万遍なく循環するように3系統ほどの細い水路が巡らされている。それに沿うように家屋配置がされていて、街路はその間を縫うようにランダムに配置されている。

○考察

こうした形態的特徴から、この集落では水路の計画が先行して行われ、それに従って住居配置が規定され、後発的に街路が計画されたのではないかと推測する。

図3. 水深の浅い水路（筆者撮影）

図4. 勝手口の洗い場（筆者撮影）

図5. 家屋の間を縫う街路（筆者撮影）

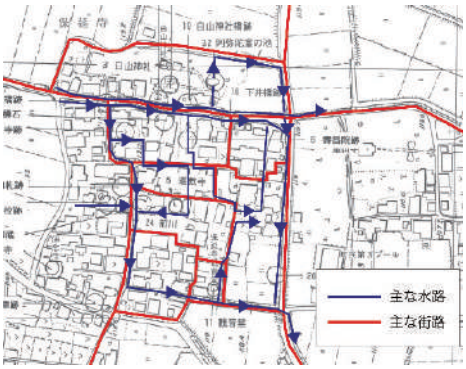


図 6. 保延寺の集落構造（『高月町村落景観情報』に筆者加筆）

3-2. 雨森

〇立地

雨森は保延寺のすぐ南側に位置する集落で、扇状地上の集落である。

〇水路

水深の浅い水路があり、集落を囲むように巡らされている。各家には水路にアクセスする 2、3 段ほどの階段が設けられている。また、各家の水路周りはよく整備されており、現在でも水路を使用している様子が見られる（図 7）。

〇街路

集落の主要な街路は主要な水路に沿って通されており、集落は水路および街路によっていくつかのブロックに区画されている（図 8）。

〇家屋配置

水路および街路によって区画されて方形のブロック内に家屋が配置されている。各家屋は概ね水路および街路に正面を向けており、敷地入口の脇には洗い場が設けられている（図 9）。

〇形態的特徴のまとめ

この集落の水路、街路、家屋配置を整理したのが図 10 である。集落は水路と街路で区画された、いくつかの方形のブロックに分かれており、ほとんどの住居は水路および街路に表を向けるように配置されている。

〇考察

上記のような形態的特徴より、水路、街路、家屋配置に一貫した計画意図が見られることから、全てが一体的に計画されたものであると考えられる。

図 7. 整備された水路周り（筆者撮影）

図 8. 水路に沿う街路（筆者撮影）

図 9. 敷地へのアプローチ（筆者撮影）

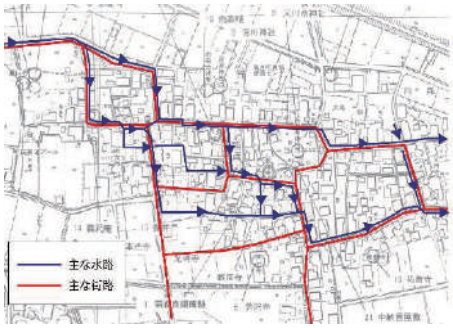


図 10. 雨森の集落構造(『高月町村落景観情報』に筆者加筆)

3-3. 唐川

○立地

唐川は庄域の北部、湧出山と赤川に挟まれた自然堤防上にある集落である。

○街路

集落の中心に日吉神社へと向かう参道が南北に伸びており、これが集落の主要道となっている（図 11）。それに直交して東西の街路が何本か通されており、これが各住居へアクセスする生活道路となっている。

○水路

南側を通る赤川の流れに沿って東から西へと流れており、概ね東西の生活道路に沿うように通されている。参道と東西の道路が交差しクランクする場所では、地形に逆らって北上している場所もある。一部の住居では、水路へとアクセスする階段が見られたものの、道路面や敷地面から水面までの高さが、保延寺や雨森と比較して高く、現在水路を洗い場として使用している様子は見られなかった（図 12）。

○街路

各住居は概ねその妻面を東西に向けており、東西方向の街路に面して玄関が設けられていることが多い。北端の日吉神社の境内から見ると棟の向きが揃っている様子が分かる（図 13）。

○形態的特徴のまとめ

水路、街路、家屋配置を図 14 にまとめた。南北の参道が集落の中心軸となり、東西の街路が直線状かつ等間隔に通されている。水路は東から西へと流れており、概ね東西の街路に沿って通されている。家屋配置は街路の軸に合わせられており、棟が東西方向を向いている。

○考察

このような形態的特徴から、山麓の寺社を基準に街路の計画が先行し、それに合わせて家屋が配置され、水路が引かれたと考えられる。

図 11. 南北の中心街路（筆者撮影）

図 12. 東西の生活道路と水路（筆者撮影）

図 13. 東西方向で揃った棟（筆者撮影）

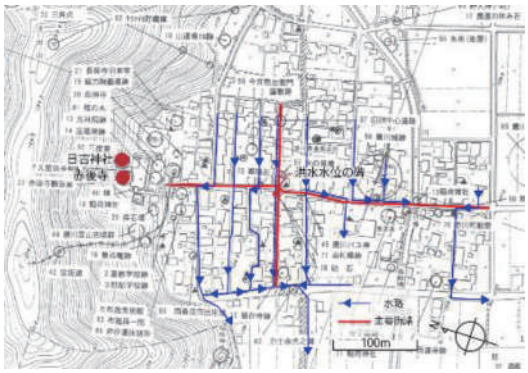


図 14. 唐川の集落構造（『高月町村落景観情報』に筆者加筆）

3-4. 東物部

○立地

東物部は氾濫平野に囲まれた自然堤防上に位置している。また、条里制の敷かれた地域にある集落である。

○街路

集落の外側の街路は概ね条里に沿って直線状に通されている。一方で集落内部の街路は条里に沿わず、屈曲しており、入り組んだものとなっている（図 15）。

○水路

水量が多くやや深い水路が北側および南側の街路に沿って東から西に流れている。集落の内部へは北東から水を引き込んでおり、各家の裏側に水路が巡らされている（図 16）。しかし、洗い場が水路に面して設けられている様子は見られなかった。水が流れず枯れている水路も見受けられた。

○家屋配置

集落の北側および南側の家屋は条里に従った直線道路に沿って一列に並び、敷地は長方形に区画されている。一方で、集落の内側の家屋は棟の向きが一様でなく、敷地形状も不定形である。また各家の敷地の間や路地との境には石垣や生垣などは設けられず、境界が曖昧となっている（図 17）。

○形態的特徴のまとめ

集落外側の街路および水路は条里に沿って直線状に通されている一方で、集落内側の街路および水路は屈曲して入り組んでいる。集落外側では家屋は一列に並び、敷地も長方形であるのに対して、集落内部では家屋の向きが一様でなく、敷地も不定形である（図 18）。

○考察

微高地上の居住が条里制に先行した可能性がある。集落外側の街路や水路は条里線に沿うように後から配置され、そこから集落内部の水路が引き込まれ、家屋や街路の間に通されたと推測できる。

図 15. 入り組んだ街路（筆者撮影）

図 16. 集落内部への取水点（筆者撮影）

図 17. 曖昧な敷地境界（筆者撮影）

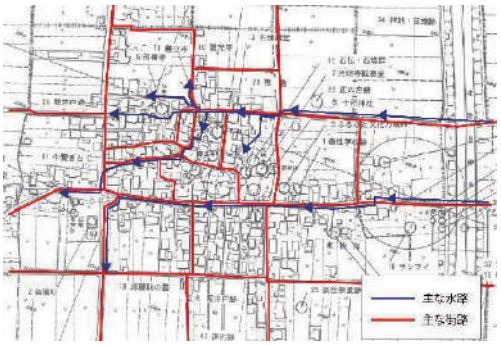


図 18. 東物部の集落構造（『高月町村落景観情報』に筆者加筆）

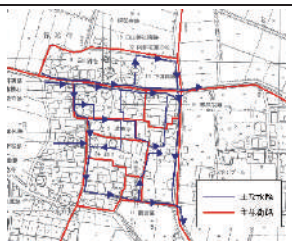
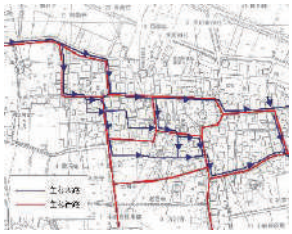
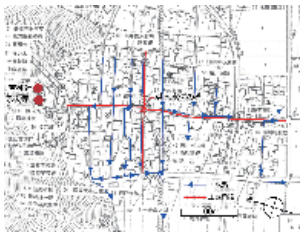
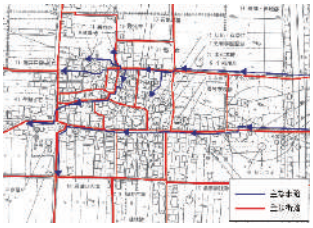
3-5. 小結

これまで 4 つの集落の様相をもとに、水利と集落のかたちについて考察してきた。同じ平野部であっても、水路と街路のどちらが先行して集落のかたちを決定づけているかが集落により異なることが見受けられた。また、水路が街路に先行して計画されたと思われる集落では、現在でも生活用水の一部として水路が使われている様子が見受けられた。

4. 考察

4 章では、3 章でまとめた集落ごとのかたちの違いについて考察をしていく。
まず、3 章で集落ごとに考察した、水路・街路・住居配置の成立順序、水路のかたちと洗い場の有無を、土地条件と比較して整理したものが以下の表である。

表 1. 集落毎のかたちおよび土地条件の比較

	保延寺	雨森	唐川	東物部
成立順序	水路＞住居＞街路	水路＝街路＝住居	街路＞住居≧水路	住居＞街路＞水路
水路	浅い、洗い場あり	浅い、洗い場あり	深い、洗い場なし	やや深い、洗い場なし
土地条件	扇状地	扇状地	山際の自然堤防	氾濫平野の自然堤防
集落構造				

上記のまとめから、扇状地上の集落では水路が集落のかたちを決定する要素として先行し、自然堤防上の集落では街路や住居配置が先行していることが言える。また扇状地上の集落では水路が浅く、洗い場が設けられているのに対し、自然堤防上の集落では水路が深く、洗い場が設けられていない。この違いの意味は何であろうか。

〇扇状地上と自然堤防上の集落の違いについて
扇状地の中央部では水が伏流するため、地下水位が深く、水利の面で不利である。そのため、扇状地上の集落では扇頂部で河川から引いてきた用水を大事に巡らせ、生活用水を確保することが重要である。そのため、水路が集落を計画する際の最優先事項として扱われるのだと考えられる。生活用水として重要な水路は、アクセスしやすい用に浅く作られ、その結果として現在でも水路の水を積極的に使う様子が見られるのではないかと推測できる。
一方自然堤防は、周囲を氾濫平野や後背湿地に囲まれているため、水を得やすい一方で、水害のリスクが高い。そのため、水と陸地を切り離すこと、限られた微高地に効率よく住居を配置することが重要である。そのため、街路や住居配置が集落のかたちを決定づけていると考えられる。また、生活用水を得ること以上に陸地を水と切り離すことが重要なため、水路は深く作られており、現在では水路の水を積極的に使う様子は見られないのではないかと推測できる。

〇扇状地上の集落同士、自然堤防上の集落同士の差異について
同じ扇状地上の集落同士、自然堤防上の集落同士であっても、本論で紹介した集落ではかたちが異なっている。その理由は何であろうか。
まず扇状地上の集落について述べる。保延寺では水路網が概ね方形で計画的に配置されているのに対し、集落内部の街路配置は入り組んだ複雑な形態である。一方雨森では水路と街路の配置が概ね一致し、方形の区画を形作り、家屋配置もそれに合わせられている。あくまで推測に過ぎないが、保延寺の形態がプロトタイプであって、雨森はそれをベースとしてより意図的に計画された集落なのではないかと考えられる。
次に自然堤防上の集落について述べる。唐川は北側に山があることでヒエラルキーが発生し、山際に宗教空間が置かれ、そこへ向けた南北の軸が引かれることで、街路が先行した集落のかたちをとったと考えられる。一方東物部は氾濫平野に囲まれた島状の自然堤防にあり、僅かな高低差に従って住居が置かれたために、住居配置が先行した集落のかたちになったと考えられる。また、その形態が条里よりも先行していたために、条里区画に沿っていないのだと考えられる。

5. 結論

富永庄域に位置する長浜市高月町保延寺・雨森・唐川・東物部の 4 集落を、水路・街路・住居配置に着目して実見し、集落のかたちの成立順序について考察を行った。また、その集落ごとの差異を生じさせる要因として、土地条件を想定し、比較を行った。
結論は以下のとおりである。

- 扇状地上の集落では、生活用水として水路が重要であるため、水路網が集落全体のかたちに先行している。また、水路へアクセスしやすいように各住居が計画されており、現在まで生活用水としての水路の利用が維持されている。
- 自然堤防上の集落では、水害リスクから居住地を守ることが重要であるため、住居配置や街路が集落全体のかたちに先行している。また、水路は水と陸地を切り離すように計画されているため、現在では生活用水としての水路の使用は見られない。
- 住居配置や街路が集落全体のかたちに先行している自然堤防上の集落では、地形が住居配置や街路の形態を左右する要素として強く作用している。

扇状地上の集落において、厳しい水利条件を克服し生活の場を作るために行ったデザインによって、現在まで水路の管理と利用が維持されている点は特筆すべきことである。

6. 参考文献

本稿で対象とした旧高月町には、町単位・大字単位の歴史・景観・水利などに関する資料が豊富にまとめられている。本稿を執筆するにあたって参考とさせていただいた資料を以下に記す。

■高月町町史編纂委員会編『村落景観情報－滋賀県伊香郡高月町村落景観情報』（高月町、1998）

■高月町編『高月町史』景観・文化財編 分冊 1（高月町、2006）

■高月町編「高月町域水系図」（高月町、2006）

第1版 令和2年　10月20日作成
第2版 令和3年　 1月28日作成

2020年度千年村ゼミ　近江湖北地方荘園調査報告書

監修

早稲田大学教授　中谷礼仁

執筆者

修士2年　齋藤湧一郎　細井菜々子

伊東華奈子　荻野智樹

修士1年　東野友紀　謝筠鈺

学部4年　斎藤拓